

「日本土壌肥料学雑誌に関するアンケート」の結果について

誌名	日本土壌肥料学雑誌 = Journal of the science of soil and manure, Japan
ISSN	00290610
巻/号	42巻3号
掲載ページ	p. 128-132
発行年月	1971年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



「日本土壌肥科学雑誌に関するアンケート」の結果について

昭和 45 年 10 月に和文誌編集委員会が行ないました「日本土壌肥科学雑誌に関するアンケート」は、会員の皆さんの御協力により 336 通の回収が得られました。とくに、韓国をはじめとする海外の会員から航空便で 5 通の回答が寄せられたことは、全く予想しないことだっただけに、ひとしお感激した次第です。あらためて、アンケートに回答を寄せられた会員諸氏に、厚くお礼を申し上げたいと思います。

第 1 表 回収アンケートの所属、年代別分布

所属	年令					計
	20代	30代	40代	50代以上	不明	
大 学	21	26	28	20	2	97
国立・公社	12	29	32	10	1	84
公 立	17	36	37	1	5	96
会 社	7	13	3	8	4	35
そ の 他	4	4	3	7	1	19
海 外	5					5
計	61	108	103	46	13	336

回答総数は、上述のとおり、336 通で、これは昭和 45 年 10 月現在の会員数 2,001 名の 16.8% にあたります。

回答を寄せられた会員の所属別、年代別の分布は第 1 表のとおりで、ほぼすべての分野、すべての年代から回答が寄せられております。

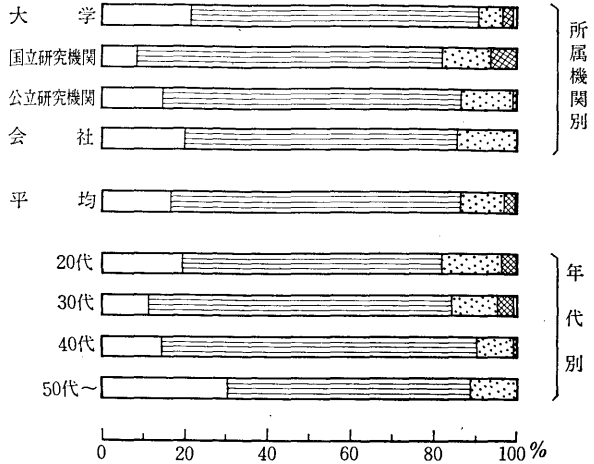
以下項目別にアンケートの集約結果を報告いたしますが、紙面の関係で、もっとも特徴のはっきりあらわれた所属別の集計を中心とし、必要に応じて年代別の結果にも触れることにいたします。

1. 会誌の利用状況について

この設問の主旨は、「日本土壌肥科学雑誌」が読まれる会誌になっているか、を調査することにあります。得られた結果は第 2 表および第 1 図のとおりであります。

結果からみますと、17% の人が「よく読んでいる」、70% の人が「関係分野だけ読む」と回答され、やや無関心と考えられる「読んだり読まなかったり」、「ほとんど読まない」の合計 13% を大きく上回っています。これから判断すれば、少な

よく読んでいる 関係分野だけ読む
読んだり読まなかったり ほとんど読まない



第 1 図 会誌の利用状況

くとも関係ある分野については、会誌はよく読まれている、と考えてよいと思われます。

この傾向は所属機関をつうじてほとんど同じですが、国立・公社関係の会員では、「読んだり読まなかったり」、「ほとんど読まない」層が 18% とやや高いのが注目されます。このことは、全体をつうじて意見の記入があった 148 通の回答の中で、「投稿が大学関係にかたよりすぎる。」「現場での研究をもっと多く掲載せよ。」という意見が 27 通（項目で整理すると第 2 位）あり、そのうち公社・国立が 12、公立が 11 通で、国立試験研究機関を中心に、かなり強い批判のあることと関係があると思われる。

また、年代別分類では、「よく読んでいる」会員の比

第 2 表 会誌の利用状況

項 目	大学	国立・公社	公立	会社	その他	海外	合計
1. よく読んでいる	21 (21.6)	7 (8.3)	14 (14.6)	7 (20.0)	4 (21.0)	3 (60.0)	56 (16.7)
2. 関係分野だけ読む	67 (69.1)	62 (73.8)	69 (71.8)	23 (65.7)	12 (63.2)	1 (20.0)	234 (69.7)
3. 読んだり読まなかったり	6 (6.2)	11 (11.9)	12 (12.5)	5 (14.3)	3 (15.8)	0	36 (10.7)
4. ほとんど読まない	2 (2.1)	5 (6.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (20.0)	8 (2.4)

() 内は % を示す。

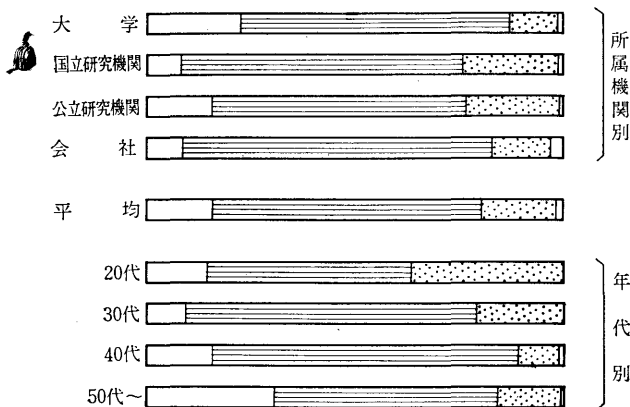
率が 20 才代と 50 才代以上に多く、これは、これから仕事を始めようとしている若い層と、広い視野で企画、管理的な仕事をされている方々の立場を反映しているように考えられます。

2. 報文・ノートについて

この設問の主旨は、会誌の主体である報文・ノートが現状でどのくらい役立っているか、また、今後どのくらい期待されているか、を調査することでした。アンケートの集計結果は第 3 表および第 2 図、第 3 図に示すとおりです。

まず、「学会誌に掲載される報文・ノートは自分の仕事に役に立つか、立たないか」という間についてです

□ 非常に役に立つ ▨ かなり役に立つ ▩ ほとんど役に立たない



第 2 図 報文・ノートの有用性

第 3 表 報文・ノートについて

項 目	大学	国立・ 公社	公立	会社	その他	海外	合計
学会誌に掲載される報文・ノートは仕事に							
1. 非常に役に立つ	22 (22.7)	7 (8.3)	15 (15.6)	3 (8.6)	3 (15.8)	2 (40.0)	52 (15.5)
2. かなり役に立つ	63 (65.0)	57 (67.8)	59 (61.4)	26 (74.3)	12 (63.2)	2 (40.0)	219 (65.2)
3. ほとんど役に立たない	11 (11.3)	19 (22.6)	21 (21.8)	5 (14.3)	4 (21.0)	0 (0)	60 (17.8)
学会誌に投稿されたことがありますか							
1. ある	57 (58.8)	35 (41.6)	16 (16.7)	10 (28.6)	4 (21.0)	0 (0)	122 (36.3)
2. 共著者として	7 (7.2)	9 (10.7)	13 (13.5)	5 (14.3)	4 (21.0)	0 (0)	38 (11.3)
3. ない	34 (35.0)	41 (48.8)	67 (67.7)	19 (54.3)	9 (47.3)	4 (80.0)	174 (51.8)
今後投稿される希望がありますか							
1. ある	87 (89.9)	68 (80.9)	72 (74.9)	14 (40.0)	10 (51.6)	1 (20.0)	253 (75.2)
2. ない	10 (10.3)	10 (11.9)	20 (20.8)	18 (51.5)	7 (36.9)	4 (80.0)	70 (20.8)

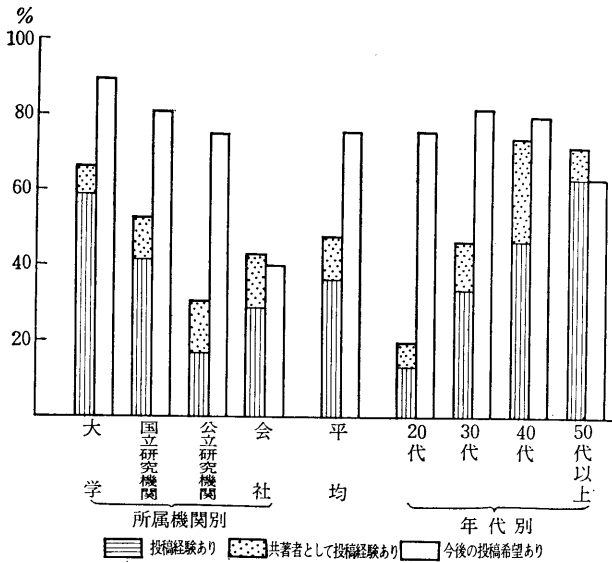
が、全体では 65% の人が「かなり役に立つ」と答えられ、「非常に役に立つ」16%、「ほとんど役に立たない」18% はほぼ同率です。これからみると、現在の学会誌の評価は中位と見られます。

所属機関別では、大学に「非常に役に立つ」が多く、反対に国立・公社、公立関係者に「ほとんど役に立たない」が高いのが特徴で、会社では「かなり役に立つ」が多いと見受けられました。これは、やはり前項で触れた掲載論文の中で大学関係の割合が高いこと、それにたいする国公立関係者の不満が強いことと関連があると思われる。

年代別での特徴は、20 才代で「ほとんど役に立たない」の比率が 31% と、とびぬけて高いことで、次代の土壌肥料分野をになう若い層が、このように感じていることは、重大な問題を提起しているように思われます。

次に投稿経験ですが、所属機関別にみますと、大学、国立・公社、公立の順に大体 20% ずつ低くなり、会社関係は国立・公社と公立の間になります。このデータは、これまで公立試験場からの投稿がいかにか少なかったかを如実に示しています。年代別にみますと、10 才年代があがるごとに、ほぼ 15% ずつ投稿経験が高くなっているのは当然の傾向といえましょう。

今後の投稿希望をみますと、平均で 75% の人が「投稿希望がある」と回答され、これまでの投稿経験の平均 36% の 2 倍以上になっています。所属機関別にみましても、大学、国立・公社、公立、会社の順に低くなっておりますが、会社以外はこれまでの投稿経験より差がずっと縮まっており、公立試験場の方も 75% が「投稿したい」との意志をもっておられる、と判断されます。年代別にみましても、若い世代から円熟の世代まで、意外なほど投稿意欲に差がななく、学会誌の将来にたいしては、所属、年代を問わず強い期待がある、と判断して差し支えないと考えます。



第3図 投稿経験および今後の投稿希望

3. 総説・資料等について

この項目と次項の文献抄録についての項目は、いわば会員へのサービス部門にたいする要望を知ることにより目的がありました。得られた結果は第4表のとおりです。

総説については、全体の50%の人が「もっと拡充すべきだ」との回答を寄せられ、「縮小すべきだ」との意見は2%以下でした。なお、記入された意見には「他分野の人にも依頼せよ」という主旨のが2通、「客観的すぎて自己の主張にとぼしく、面白くない」というのが1通、「公募にし、論争もおこなえるようにせよ」が1通、

「作物別総説を考えよ」が1通ありました。

資料については「今の程度でよい」がもっとも多く、48%でしたが、公立関係だけは「もっと拡充すべきだ」という意見が現状維持を上回っています。

「講座」についての設問は、その希望があるのではないかと、との川口会長の意向もあって設けましたが、所属別、年代別を問わず、かなり高い要望があり、全体では61%を占めました。講座の内容については、平均すると「実験・分析技術」39%がもっとも多く、「基礎理論」31%、「技術的応用」24%の順になりましたが、一つの項目に圧倒的多数が集中することはありませんでした。所属別では、大学および国立・公社が「基礎理論」、公立が圧倒的に「実験・分析技術」、会社がこれも圧倒的に「技術的応用」に傾いているのが特徴です。年代別では比較的若い年代に「実験・分析技術」が多いように見受けられました。

記入された意見のうち、注目すべき提案として「講習や野外実習も考慮せよ」というのが1通ありました。

4. 文献抄録について

文献抄録については、これまででも批判が多いようでしたので、第1問で利用状況を調査しました。その結果は第5表のとおりで30%の人がよく利用し、46%があまり利用せず、22%がほとんど利用していない、ということになりました。利用状況としては、あまりかんばしくないといえます。

記入された意見に「古いものは困る。新しい文献

第4表 総説・資料・講座について

項目	大学	国立・公社	公立	会社	その他	海外	合計
総説は							
1. もっと拡充すべきだ	47	48	46	16	7	3	167 (49.6)
2. 今の程度でよい	45	31	45	14	9	1	145 (43.1)
3. もっと縮小すべきだ	0	3	1	1	0	0	5 (1.5)
資料は							
1. もっと拡充すべきだ	28	30	48	15	7	3	131 (39.0)
2. 今の程度でよい	45	43	43	18	11	1	161 (47.9)
3. もっと縮小すべきだ	18	4	3	1	0	0	26 (7.7)
総説・資料のほかに「講座」をもうけることについて							
1. もうけてほしい	53	50	67	22	11	4	207 (61.4)
2. どうでもよい	23	10	18	7	5	0	63 (18.7)
3. もうけなくてもよい	17	21	10	3	3	0	54 (16.0)
「講座」をもうけるとしたら、その希望は*							
1. 基礎的理論に関するもの	39	32	15	9	6	2	103 (30.6)
2. 実験・分析技術に関するもの	36	31	50	6	4	3	130 (38.6)
3. 技術的応用に関するもの	12	14	28	17	8	1	80 (23.8)
4. その他	0	0	1	0	0	0	1 (0.3)

* 複数の項目を記入されたものがあるので、合計が回答数より多い場合がある。

第5表 文献抄録について

項 目	大学	国立・ 公社	公立	会社	その他	海外	合 計
文献抄録は							
1. よく利用している	25	29	26	12	6	2	100 (29.7)
2. あまり利用していない	42	28	55	18	9	3	155 (46.0)
3. ほとんど利用していない	29	24	13	6	1	0	73 (21.6)
文献抄録を廃止して、かわりに文献レビュー、大学、研究機関、情報サービス機関にある学術雑誌名、利用方法などの紹介欄をもうけることに賛成ですか反対ですか							
1. 賛 成	65	55	72	24	8	4	288 (85.5)
2. 反 対	22	16	14	8	5	1	66 (19.6)

を」という注文、「標題だけでは困る。要旨を必ずつけよ」という注文がそれぞれ4通あったことは、理由がどこにあるかを示しているようです。意見でもっとも多かったのは「県農試や各大学の報告、紀要なども抄録せよ」との要望(6通)ですが、これは第42巻から実施したいと考えております。

第2問は、後にのべます論文の投稿から掲載までの期間がかかりすぎる問題と関連して、もし文献抄録の利用状況がそれほどよくないなら、思い切って廃止または縮小して、そのページを報文・ノートに回せないか、という窮与の一案を案じて設けたのですが、結果的には質問が誘導的にすぎました。集計としては86%の方が賛成と圧倒的でしたが、内容的には「よく利用している」と回答された人のうち30名近くが、同時に「廃止賛成」に印をつけられ、さらに記入された意見の中に「文献抄録も文献レビューも、ではないか」とのお叱りが2通あったことから、結果の処置については、十分慎重にいたしたいと思えます。

5. 別刷について

この項目は、投稿者にたいするサービスとして計画しました。結果は第6表のとおりで、「今の体裁でよい」22%が「希望者には有料で表紙をつけるべきだ」35%を上回っています。所属別ではこの傾向はあまり変わりませんが、年代別には興味深い傾向が出ています。すなわち、30才代以下は現状維持が多く、40才代以上は表紙付希望が上回って、年代で完全に逆転します。このこと

は、投稿経験、そして何よりも収入の差によるものと推察されます。しかし、表紙をつけることは、「希望者だけに、有料で」という条件ですから、近い将来に検討のうえ実現したいと考えます。

6. 記入された意見について

項目別および全般的なことについて、自由に意見を記入できる欄を設けましたところ、148名、つまり回答総数の44%の方が記入されていました。

記入された意見は、本学会の体質から項目ごとの具体的提案まで、集計のさいに便宜上わけた項目数でも60以上にのぼり、詳細に報告するのは不可能です。これらは評議員会、編集委員会および執行部で十分参考にさせていただくことにし、ここでは要点のみ報告いたします。

学会誌全般に関する意見としてもっとも多かったのは、「投稿から掲載までの期間が長すぎる」33通、「投稿が偏っている。現場の研究をもっと多く掲載せよ」27通、「会誌発行のおくれがひどすぎる」22通です。これらと関連して「掲載される報文数が少ない」16通、「隔月刊または季刊にして、内容を充実させ、きちんと発行せよ」6通などがありました。

また、内容に関しては、「基礎部門と応用部門にわけたらどうか」7通、「公害研究を積極的にとりあげよ」6通、「論争が少なすぎる。討論の場をつくれ」7通、体裁に関しては「紙質、活字、表紙などが他学会に比べて悪い」7通などが主なものです。

第6表 別刷について

項 目	大学	国立・ 公社	公立	会社	その他	海外	合 計
別刷は							
1. 今の体裁でよい	40	28	44	19	6	4	141 (41.8)
2. 希望者には表紙をつけるべきだ (ただし有料)	42	31	30	9	6	1	119 (35.3)
	20代	30代	40代	50代以上	不 明		
1. 今の体裁でよい	32	48	38	13	5		
2. 希望者には表紙をつけるべきだ (ただし有料)	11	43	40	21	3		

論文の投稿から掲載までの期間の長いことは、昨年 4 月に調査したところでも、約 1 年が土壤肥科学会と蚕糸学会、8~10 カ月が植物病理学会で、他の関連学会では大体 6 カ月が標準のようで、否めない事実です。これの解決は増ページ以外にありませんが、現在その方法を模索、検討中です。

掲載される論文が大学に偏っていることも、たとえば第 41 巻に掲載された報文・ノート 91 篇の内訳は、大学 60、国立・公社 20、公立 3、会社 8 となっており、敢然たる事実です。解決するには大学以外、とりわけ公立試験場からの投稿の増加が必須です。そのため、アンケート結果によれば、公立機関の会員の方も高い投稿希望をもっておられることに期待して、どしどし投稿していただきたいと思います。それとともに、部門長にお願いして、積極的に投稿を依頼、あっせんする方法も検討中です。

会誌発行のおくれも残念ながら事実で、責任を痛感いたします。現在のところ、最大の隘路は印刷関係にありますので、12 月に発足しました「学会事務体制検討小委員会」で発行のおくれ、隔月刊問題なども含めて検討されています。

学会誌の体裁の改善、応用啓蒙誌の別だて刊行などは、会費値上げと関連がありますので、目下のところ、めどは立ちません。

なお、和文誌編集委員会にたいする意見としては、「論文審査がこまかすぎる」4 通、「論文の訂正を要求するときは審査委員名を明記せよ」1 通、「編集委員は公募制にせよ」1 通、「非常任編集委員は廃止せよ」1 通などがありました。

最初の点に関する編集委員会の意見は、運用上十分注意することは当然ですが、少なくとも意図的にこまかすぎる審査はしておりません。第 2 の意見とも関連して、審査委員と著者の見解が相違することはあり得ますが、その場合にも、その理由で掲載を拒否したことはないはずで、審査委員名を記載することは、ある学会での経

験でも、むしろ弊害が多かったことなどから、やはり無記名で行くことにいたしました。最後の 2 つの意見は、編集委員会の権限をこえる問題で、検討しておりません。

さらに、審査用紙の改善について貴重かつ具体的な提案をいただきましたが、お考えは十分とり入れさせていただきたいと考えております。

なお、ここにはのべられませんでした、報文・ノートの脚註にページ数および著者所属機関のアドレスを入れよ、との提案は、さっそく採用させていただきました。

最後に、土壤肥料以外の分野の会員、海外の会員から寄せられました意見は、少数ながら貴重なものがありました。お礼の意味をかねて、一つずつ原文のまま掲載いたします。

- “1. 会誌名を改めた方がいいと思う。強いていえば「土壤学雑誌」にでもした方が現在の内容にふさわしいのではないか？
2. 年に私はほとんど出席できなかったことがない。それは、日本化学会の年会と同一期日にあるからである。出来れば、化学会の年会と時期をちがえてほしい（年会の方には、役に立つ内容の発表が若干ある）。化学会に対し従属的にせよ、という訳ではない。しかし、化学者を shut out している状態であることは本会にとって良いことであろうか、と感じる。
3. 化学方面の学会にくらべ、こじんまりしている、もしくは閉鎖的な感じがあるように思う。”

(大学、無機工業化学)

“日本土壤肥科学雑誌デスカラ日本ノ事情ヲ中心トシテ編輯サレルノハ当然ノ理デスガ東南亜細亞諸外国ノ事例モ特別寄稿又ハ特別編輯ノ形デ組入レテ下サレバ外国ノ諸読者ニハ益々有益ナ学会誌ニナルコト思料サレマス。” (海外、会社、肥料・植物栄養)

(和文誌編集委員会、編集幹事)